

か かん けん 河環研だより



アマゴ

- 1 高円宮妃殿下お成り
- 2 新規に開発したアユ優良種苗の養殖
実用化研究
- 3 渓流魚の新しい放流方法「親魚放流」
について

1 高円宮妃殿下お成り



高円宮憲仁親王妃久子殿下が地方事情御視察の一環として、本年10月14日に当研究所を訪問されました。当日は、6月に開催された第30回全国豊かな海づくり大会において、天皇皇后両陛下から御放流、御手渡しいただきました魚と当研究所で行っているアユ、カジカ、ウシモツゴなどの調査研究内容などを中心に御説明させていただきました。

殿下は職員の説明に熱心に耳を傾けられ、なかでも漁獲されたアユに占める天然遡上アユの割合についての話題には大変興味を持たれたご様子で、その多さに感心されていました。

(岐阜県河川環境研究所長 佐伯秀紀)



ウシモツゴ

2 新規に開発したアユ優良種苗の養殖実用化研究

当研究所では、冷水病に耐病性のある種苗の開発・研究を行っています。種苗は、海産と湖産双方をもとに作出した系統と海産をもとに選抜・作出した系統の2系統があります。現在、実験レベルでは、冷水病感染後の生残率80%を達成しています。

今年度の秋より、これらの種苗の養殖特性を評価するため、県内の2養魚場を対象に実用化試験を開始しました。今後、成長や生残状況を調査し、その特性を把握するとともに、さらなる冷水病耐病性の向上を目指していきます。

(資源増殖部 荻谷哲治)



しんぎょほうりゅう

3 溪流魚の新しい放流方法「親魚放流」について

現在、国内各地で実施されている溪流魚の発眼卵埋設は、マニュアルも作成されているとはいえ、うまくいかない場合もあるようです。そこでその代替策として、親魚放流（産卵期に十分に成熟した魚を河川に放流し、この放流魚に自発的に産卵させる増殖手法）の可能性を検証しました。この成果は、今年5月に刊行された日本水産学会誌76巻3号に掲載されました。

当研究所では、完全に成熟したアマゴの雌親魚と雄親魚を河川に放流し、実際に産卵するかどうかを確認するとともに、産卵場所の特徴や産み込まれた卵の発眼率を調査しました。その結果、放流当日から産卵行動が確認されました（写真1）。また、産卵場所の立地条件は野生魚のものと同様で、放流魚でも正常に産卵することが確認され、発眼率は平均90.6%と良好で、ふ化も確認できました（写真2）。

この親魚放流は発眼卵埋設に比べて、

- ① 場所選定の失敗が少なく、作業量も少ない。
- ② 成魚放流を行っている漁業協同組合であれば、技術の習得や用具の購入の必要がない。
- ③ 孵化や浮上の時期がより野生魚に近くなる。
- ④ 産卵シーンを間近で観察することができ、地域の観光資源や環境教育の教材として活用することもできる。

等の利点があります。

逆に欠点として、

- ① 大量放流には活魚トラックが必要となり、コストがかかる。また、川沿いに車道のない場所では、親魚の輸送に手間がかかる。
- ② 親魚1尾の損耗が増殖効率を著しく低下させる。
- ③ 産卵適地の無い川には放流しても効果が望めない。

等が考えられます。

親魚放流を実施する場合、上記の利点・欠点をしっかり認識して行っていくことが大切です。

（下呂支所 徳原哲也）



写真1



写真2



発眼卵調査

職員の異動（10月1日付）

○ 新任者

石樽和成 総務課 課長補佐（前 高齢福祉課）

○ 他機関への異動者

有田美穂 教育研修課 主任

○ 退職者

森山聖子 生態環境部 主任研究員